

平成24年度 【大学振興会研究奨励補助】研究成果報告書

学部名 生活科学部

フリガナ トミダ カズコ
氏名 富田 和子

研究期間 平成24年度

研究課題名 「第30回 若竹集」とその周辺

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	富田 和子	生活科学部	助教
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

「第30回分 若竹応募綴」は、大正十年秋に準備された、東三河の豊川市を中心とする銀珩社の「第30回 若竹集」に応募した133名の応募用紙を綴ったもので、その撰句日程と点者名及び応募者の主な居所の記載がみられる。これは、残っていることの少ない、句会興行の第一次資料である。当時、これをもとに、「第30回 若竹集巻本」が作成され、「第30回 若竹集」の句会興行が行われた。そこで、東三河についての調査・研究は手薄であるため、これらを活用しつつ、更に、同年代の資料の収集も行い、大正10年頃に行われた三河地方を中心とする大規模な狂俳の句会興行の実態と句作りの傾向を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

「第30回分 若竹応募綴」「第30回 若竹集巻本」を活用しつつ、同年代の資料の収集、整理と検証を行う。手順は、次のとおりである。

- ①個人蔵の資料「第30回分 若竹応募綴」「第30回 若竹集巻本」を借用し、デジタルカメラをつかって、デジタルデータを作成し、その特徴を検討する。
- ②「第30回分 若竹応募綴」から点者・応募者を整理する。
- ③同年代の資料の収集
- ④整理と検証

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

まず、狂俳の第一次資料と第二次資料の違いについて確認することから始めた。

次に、従来の研究から、名古屋では水音社から離れた華胥庵夢言ら金蘭社グループにより明治35年10月に年刊で「金蘭集」が創刊し、更に、同42年秋に月刊の「狂俳」が金蘭社より創刊するなど、活発な活動が確認されている。同様に、大正期の東三河地方でも、新しい狂俳を求めて、知新会の内紛をきっかけに、大正7年、おそくとも翌年2月には銀珩社が知新会から完全に独立し、3月もしくは5月から機関誌「若竹」が創刊されたことが判明した。

そして、「第30回分 若竹応募綴」「第30回 若竹巻本」「夢廼家圃 俳名披露 兼銀珩社新加入記念 狂俳大会」という句会興行に必要な第一次資料群から、東三河の愛好者たちの組織力・機動力の良さが窺えた。

この銀珩社は、正社員になるには先輩の推挙が必要である上、正社員になることはとても名誉なことであった。そして、大正10年2月、当時23名程の銀珩社社員が協力して運営する月並会は花巻方式であった。これを、東三河だけでなく、吟録方式で楽しんでいた西三河や名古屋を含む尾張の愛好者たちも楽しみにしていたことがわかった。

また、東三河の点者の中には、吟録方式を批判する者もいたが、尾張地方の点者を、点者として受け入れる懐の深さと、句に対する深い愛情を持っていたことが窺えた。

最後に、「第30回分 若竹応募綴」「第30回 若竹巻本」から、月並会である「若竹集」の興行手順などを窺える個所を紹介した。

貴重な研究助成金を賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。今後ともよろしくご指導の程、お願い申し上げます。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

① 狂俳	② 東三河	③ 大正時代	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

公開した研究成果

東海近世文学会7月例会(平成24年7月14日 於:熱田神宮文化殿)で口頭発表「九十年前の狂俳第一次資料——東三河「若竹集」を中心に——」を行った。

これを踏まえ、「大正十年頃の東三河の狂俳——銀珩社「若竹集」を中心に——」(「椋山女学園大学研究論集」44号 人文科学篇 2013年3月発行予定)を執筆した。